



岐阜県立
ぎなん
岐南工業高校

学力層別指導

学力層に応じた 組織的な指導で、 大学進学者数を伸ばす

◎1943年、岐阜市立工業高校として開校、56年に県立に移管し現校名に。2015年度、文部科学省「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」の指定を受ける。レスリング部やバレーボール部、自転車競技部など、全国区で活躍する部活動を多数擁する。

設立	1943(昭和18)年
形態	全日制／機械科・自動車科・電気科・電子科・建築科・土木科／共学
生徒数	1学年約280人
2015年度進路実績(現役のみ)	国立大は、信州大に1人が合格。私立大は、明治大、愛知工業大、中部大、名城大などに延べ29人が合格。短大、専門学校進学33人。就職は、川崎重工業、中部電力、東海旅客鉄道、トヨタ自動車などに175人。公務員3人。
住所	〒500-8389 岐阜県岐阜市本荘3456-19
電話	058-271-3151
Web Site	http://school.gifu-net.ed.jp/ginan-ths/

変革のステップ

背景

◎目的意識が明確な生徒が少なく、学力不足による大学進学後の留年・中退や就職試験の不採用など進路面の課題を抱えていた

STEP 1

実践

◎意識調査の結果に基づいて進路指導を拡充し、基礎学力向上に向けた学び直し、上位層のための理数コース・特進クラスの設置などを実施

STEP 2

成果

◎一般入試に挑戦する生徒が増え、特進クラスから国立大学合格者が出る。加えて、就職への意欲も高まった

STEP 3

山積する課題を前に
組織的な進路指導へと転換

ここ数年、岐阜県立岐南工業高校の躍進が著しい。信州大学や岐阜大学など、国立大学の合格者が毎年出ており、雇用環境の好転の影響もあって、就職実績も堅調に推移している。

同校が改革に着手したのは、藤原竹志先生が進路指導主事となった4年前のこと。当時、基礎学力の定着が不十分なことにより就職試験で不採用になる生徒や、大学進学後に授業についていけず留年・中退する者が出るなど、進路指導・学習指導の抜本的な改革が必要であった。

「本校には、中学校時代から学習習慣が定着していない生徒や、勉強が苦手な生徒が有るから工業高校を選んだという生徒もいます。そうした状況に対して、入学時から目的意識を持たせる指導や、大学進学後・就職後を支える基礎学力の定着に重点を置く、進学・就職に向けた組織的な指導体制の構築が急務となっていました」(藤原先生)

特に同校が課題として捉えていたのは、成績上位層の生徒への指導だった。早期から手厚い指導をしていけば伸びたかもしれない生徒や、より高い目標を掲げることでもっと頑張れた生徒もいたのではないかという思いから、それまで担任個々の力量や努力に頼っていた指導を、組織的・効率的に行うための改革に着手した。

生徒・保護者・企業を調査し 実態に即した指導へ

まず進路指導部が行ったのは、生徒の意識や進路先の実情などの把握だ。進路指導部の古家幸司先生は、その意図を次のように説明する。

「これまで本校には、データを指導改善に生かす体制がなく、生徒の意識や社会のニーズを感覚的にしか捉えていませんでした。学習や進学・就職に対する生徒の意識、不合格者の成績、不採用の理由などのデータを集めて分析し、生徒の課題に応じた取り組みを適宜行うとともに、効果が見られない指導はやめるなど、指導の効率化を図ろうとしました」
そこで、同校は生徒・保護者・企業へと次々



藤原竹志 ふじわら・たけし
岐阜県立岐南工業高校
教職歴32年。同校に赴任して10年目。進路指導
主事。電気科。「今日進まなければ明日も進まない。生徒の進むべき道の可能性を広げたい」



古家幸司 ふるや・こうじ
岐阜県立岐南工業高校
教職歴10年。同校に赴任して11年目。進路指導部
土木科。「常に生徒主体！」



林貴康 はやし・たかやす
岐阜県立岐南工業高校
教職歴11年。同校に赴任して5年目。進路指導部
機械科。「失敗を恐れず挑戦し続けたい」

に独自のアンケートを行った。例えば、生徒には、就職で重視することや進路情報の活用度、職業観などを聞き、進路意識の実態把握に努めた(図)。同校に求人が来ていた約200社には、生徒に何を期待しているのかなどを聞いた。

そうした調査の結果、1年生では就職先選びの条件として、仕事内容に次いで賃金体系や休日がきちんとして取得できるかなどを挙げる割合が高いことが明らかになり、働く意義を自覚させる必要があることが分かった。

「漠然と『大学に行きたい』『就職したい』
と思っただけでは、目標に向かって最後まで頑張り抜くことは難しいでしょう。何を

図 1年生の進路意識調査(抜粋)

進路適性の理解度 (%)	YES	どちらでもない	NO
A. 自分の特徴をつかんでいる	42.3	46.4	11.3
B. 自分の進路希望への適性が分かっている	33.9	49.6	16.4
C. 自分の能力の特徴を挙げることができる	32.8	49.3	17.9
D. 自分の体力・健康などの特徴を挙げることができる	62.4	29.6	8.0
E. 自分の性格・適性・能力・興味と進路先が結びついている	36.5	54.4	9.1
進路情報の理解と活用 (%)	YES	どちらでもない	NO
A. 必要な進路資料を自分で探せる	43.4	44.5	11.7
B. 産業や職業の種類や内容について調べている	32.1	31.4	36.5
C. 資格・免許の種類や取得方法について調べている	36.1	32.5	31.4
D. 希望の進路先の実際の様子を見学または聞くなどしている	17.5	30.7	51.8

上記以外に、「望ましい職業観の形成」「将来の進路の設計」についても、それぞれ5項目を設けて調査し、生徒の実態を把握した。

*学校資料から一部抜粋して編集部で作成

したいのか、目標を明確に持たせることが大切であり、早期に意識づけを行わなければならないと考えました」(古家先生)

1年生での進路行事を大幅に増やしたのは、そのためだ。将来像が明確ではない生徒・保護者を対象とした進路相談週間、保護者対象の進路ガイダンスなど、新しい取り組みも始めた。また、県内の自動車整備士が不足しているという地元ニーズを受け、2015年度には専門学校を見学する1年生対象のバスツアーも実施した。

さらに、社会人講話の回数も増やし、進路ガイダンスでは企業から講師を招くようにした。そうした外部人材の活用は、生徒の進路意識を刺激するだけでなく、教師が社会に目を向ける良いきっかけにもなっているという。

「社会人が共通して言うのは、『人のために働く』という言葉です。給料や休日を重視して仕事を決めていたのでは、すぐにやる気を失い、早期離職を招きかねません。『働く』ことをもつと掘り下げて考えられるよう、生徒の心に響く伝え方は何か。私自身、企業人の職業観から学んでいます」(古家先生)
教師が普段から生徒に話している内容が、講師の言葉で「先生の言うことは正しかった」というように、裏づけられることもある。学校外の人的リソースを活用することで、生徒・教師ともに、多角的に社会を見通す力を養っている。

*プロフィールは2016年3月時点のものです

毎朝10分間の朝学習で 基礎学力向上を図る

学力層に応じた学習機会の提供にも力を入れた。就職試験で苦戦を強いられる成績中・下位層の生徒への対策として始めたのが、毎朝10分間の朝学習だ。当初は数学の独自プリントを、ベネッセの基礎力診断テスト(*1)の直前などに実施していたが、学習習慣の定着と落ち着いた学習環境づくりのためには毎日行う必要があると考え、3年前から全学年で実施している。1年生はベネッセのマナトレ(*2)の標準編、2年生は挑戦編に、3年生は学校独自の就職対策プリントに取り組み。学力向上の取り組みを主導してきた林貴康(たかひこ)先生は、次のように述べる。

「マナトレは級ごとのテストで認定証ももらえ、目に見える成果が出するため、生徒の学習意欲の向上につながっています。本校には、潜在能力は高いものの、周りに流されて学習を怠ってきた生徒が少なくありません。初めて学習に熱心に取り組んだ結果、自分が学習に向いていることに気づいて、学習が楽しくなる生徒もいます」

基礎力診断テストを年1回から3回に増やし、テストの3週間前には付属のテキスト「One-week Trial」に取り組むようにした。結果は、生徒に返却するだけでなく、校内での過年度比較、他校比較などの指標として蓄積し、

面談や進路選択の資料として活用している。

5教科7科目の授業時間を増やした 理数コースを新設

成績上位層の生徒の力をさらに伸ばす仕組みとして、理数コースを設置した。それまで、公募制推薦入試や一般入試で大学進学を希望する生徒には、担任が放課後補習を行うなど、志望に応じて個別に対応する場合が多かった。しかし、大学進学希望者が増加したため、従来の指導では担任の負担が大きく、対応しきれなくなり、組織的な指導体制を構築する必要が出てきた。さらに、国語や数学、英語などの大学入試に必要な教科・科目の授業時間が少ないことも課題だった。工業科における5教科7科目の単位数は、普通科に比べて延べ30単位ほど少なく、入試に対応できる力を育みきれいでなかった。

そうした課題に対応するため、2年生から、大学進学希望者を対象とした「理数コース」と、それ以外の「専門コース」に分けることにした。理数コースにおける5教科7科目の単位数は、普通科と同じ単位数になるほど増やし、専門科目を少なくした。科目によっては、1科目の履修者が少人数という場合もあるが、そのような教育課程を組むことで、進学志望者への指導体制を充実させたのだ。また、途中で志望が変わっ

た場合も考慮し、3年生で専門コースに変更できるような、柔軟に対応することが可能な体制とした。

「理数コースを選択すると専門科目が少なくなり、取得が難しい資格も出てくるため、保護者とも相談の上で履修計画を立てています。多様な学びの機会をきちんと用意し、進路選択の幅を広げてあげることが、我々の責務だと思っています」(藤原先生)

成績優秀者の表彰制度で 生徒が切磋琢磨する雰囲気醸成

さらに難易度の高い大学の志望者には、「特進クラス」を用意した。これは、希望者が参加できる放課後・土曜日の補習で、ウェブ教材で自学自習に取り組み、分からない箇所は教師に質問するというもの。あくまでも自学が基本であるため、学習に自ら取り組み意欲のある生徒でなければいけない。15年度は2・3年生合わせて20〜30人が登録。年度末には5、6人まで減ったが、最後まで頑張った生徒たちは、国立大学や私立大学の一般入試に次々と合格している。

成績上位者を対象とした表彰制度も整えた。各クラスで学期末時点での評定平均上位5人の生徒を表彰し、副賞として校章が箔押しされたノートを進呈している。

「『自分は上位層なのだ』というプライドを持ってもらうと同時に、良い意味でのプレッシャーをかけたという思いもありました。1度表彰されるとほかの生徒から一目置かれるようになり、簡単には成績を下げられなくなりません。『次も頑張ろう』『もっと上に行きたい』という意識が、自律的な学びに結びつくことを期待しています」(林先生)

「各クラス5人の表彰は多すぎるのではないか」という意見もあったが、上位3人にすると常に同じ顔ぶれになりやすく、表彰の対象が固定化する恐れがあった。5人とすれば、6位以下の生徒との入れ替えも容易にあり得ると考え、あえて5人とした。上位10人ほどの生徒の間に切磋琢磨する雰囲気を生み、それをクラス全体に波及させたいと考えている。

ICTを活用した授業で コミュニケーション能力を育む

一連の改革が同校に活気をもたらしていることは、冒頭に述べた通りだ。国立大学合格者の増加に加え、私立大学へも、3年前からは指定校推薦入試だけでなく、一般入試に挑戦し、合格を勝ち取る生徒が大幅に増えた。さらに、生徒の意欲の高まりを受け、15年度には、土木科の生徒が県内の高校で初めて「高校生ものづくりコンテスト全国大会」の測量部門で優勝する

など、課外活動でも成果が表れ始めている。

その一方で、新たな課題も浮上している。学力不足による就職試験の不採用や進学後の留年・中退は減ったが、コミュニケーション能力不足のために不採用となるケースが増えているのだ。

同校は、この課題の解決に向け、15年度に文部科学省から指定を受けた「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」を軸に、新たな改革を進めている。学力とコミュニケーション能力の向上を目的として、ICTを活用したアクティブ・ラーニングや言語活動を授業に取り入れようと考えているのだ。その具現化に向けて、現在、タブレットや電子黒板の整備、教員研修

や公開授業などを行っている。16年2月の公開授業では、生徒が俳句に自分がイメージする曲や画像をつけ、編集意図を解説する言語活動を行った。今後は、様々な学習スタイルと組み合わせた協働学習に取り組んでいく予定だ。

「コミュニケーション能力の低下は、おそらく本校だけの問題ではないと思います。部活動で培う明朗・闊達さ、朝学習や理数コースなどで培う学力に、コミュニケーション能力や協働する力が加われば、本校の生徒への評価はさらに高まるでしょう。『未来のメー ド・イン・ジャパンを担うのは本校の生徒』という気概を持って、彼らの力を最大限に引き出す教育を目指していきます」(古家先生)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

仕事に線引きをせず、 今の生徒に必要なことを考える

進路指導部 林 貴康

長年、工業高校で指導していて感じるのは、生徒たちの可能性の大きさです。入学時には学習が苦手な生徒もいますが、専門技能の習得や資格取得のための勉強、部活動などに打ち込む中で、どんどん変わっていく姿を何人も見てきました。中学校までの苦手意識を克服し、わずか3年間で人生観を大転換させる可能性が、工業高校の学びの中には凝縮されていると感じます。

ここ4年間は進路指導部に所属し、朝学習や表彰制度など、様々な学力向上策を打ち出してきました。私はむしろ工業科の教師こそ、進路指導のノウハウを持つことが必要だと思います。工業高校の生徒に求められる力、大学入試の優遇制度などの情報を普通科の先生などに伝え、「この科目を重点的に指導してください」「口頭試問の対策をお願いします」などと、積極的に連携を図ることで、生徒の合格の可能性はさらに高まるはずです。

もし、ほかの分掌になったとしても、同じように学校を良くする姿勢で臨みたいと思います。今の生徒や学校に何が必要なのかを考え、学習習慣の定着や意欲向上に課題を見だし、その解決のために何をすべきかを考えた結果が、一連の取り組みにほかなりません。大切なのは、所属先ではなく、目の前の生徒に何が必要なのかを考えることです。これからも自分の仕事に線引きをせず、あらゆることに貪欲に取り組んでいきたいと思っています。